

山口県立山口博物館所蔵幕末維新関係資料ガイド4

山田 稔¹⁾

Yamaguchi Prefectural Museum Collection of Bakumatsu Ishin related materials guide4

Minoru YAMADA

本稿は、明治150年を期に、山口県立山口博物館所蔵の幕末維新関係資料ガイドを意図して執筆したものである。前稿(『山口県立山口博物館研究報告第46号』(2020.3))に続く第4稿として、展示や出版物掲載等で利用頻度が高い資料28点を選び、図版付き解説を付した。



102 温故東の花第四編 旧諸侯参勤御入府之図

楊州周延

明治22年(1889)

1枚(3枚1組)

33.8×70.6 920-155

長州藩13代藩主毛利敬親の参勤交代の様を描いたもの。画面左端には、「長門中将具足」と書かれた毛利家家紋入りの櫃が見え、その後ろで武家奉公人たちが白い毛槍を投げあうパフォーマンスが目を引く。横一列の御弓に続き、扇形の鞘を持つ槍、藩主の駕籠、螺鈿の柄を持つ2本の槍が描かれる。この3本の槍は、大名家の名鑑『武鑑』にも描かれている。本図は明治に入り、当時を想像して描いたものであり、実際の行列通りではなく象徴的な構図となっている。

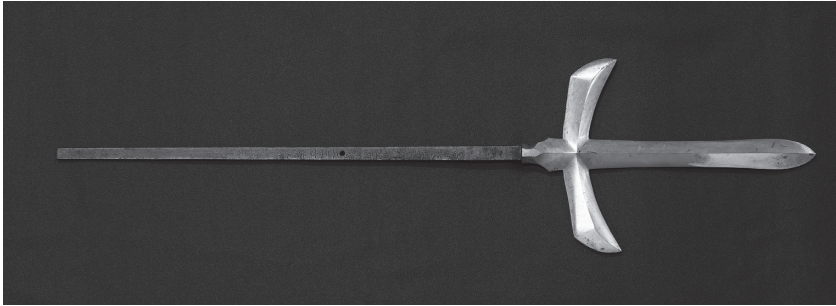
1) 山口県立山口博物館(歴史)

目 次

No.	資料名	制作者	年代
102	温故東の花第四編 旧諸侯参勤御入府之図	楊州周延	明治22年(1889)
103	槍 桐紋螺鈿拵	二王方清	江戸時代(17~18世紀)
104	関札「亀井隠岐守宿」		嘉永4年(1851)2月12日
105	関札「戸川鉾三郎宿」／「毛利筑前宿」		元治元年(1864)
106	鴻城道場門前橋ノ図	松光斎長栄	明治初期
107	携帯用硯箱 木戸孝允所用		幕末~明治初期
108	提灯 周布家家紋入り		江戸時代後期
109	周布政之助肖像		
110	周布千代肖像		
111	周布千代写真		明治15年(1882)9月27日
112	周布家家族写真	鈴木真一撮影	明治10年代後半~20年代前半
113	染付水指 周布政之助愛用		幕末期
114	粟田焼 周布政之助愛用		幕末期
115	錫杯洗		幕末期
116	小秤 周布政之助所用		安政6年(1859)3月17日
117	尺時計		幕末期
118	周布政之助所用印類		幕末期
119	朱檀縁富貴の硯屏 村田清風所用		幕末期
120	木戸孝允ほか集合写真		明治初年
121	木戸孝允三十三年忌弔詩書	伊藤博文	明治42年(1909)5月26日
122	木戸孝允三十三年忌弔詩訂正書	伊藤博文	明治42年(1909)6月4日
123	木戸孝允詩書		元治元年(1864)7月~慶応元年(1865)4月
124	木戸孝允詩書		明治4年(1871)8月24日
125	木戸孝允詩書		明治2年(1869)3月
126	木戸孝允肖像		
127	枢密院会議之図	楊州周延	明治21年(1888)10月
128	帝国議會衆議院之図	楊斎延一	明治24年(1891)
129	故大村兵部大輔銅像真図	松森宗平	明治26年(1893)3月11日

凡 例

- 一、記載項目は、資料名/筆者・制作者/制作年代/品質・形状/員数/法量/整理番号/解説、の順である。
- 一、法量は、原則として本紙・本体のもので、単位は、センチメートルである。
- 一、人名は、時期による名乗りの違いや変名などがあるが、記述の煩雑を避け、一般に通用しているものを使用した。
- 一、2015年NHK大河ドラマ特別展図録『花燃ゆ』、明治150年記念特別展図録『激動の幕末長州藩主毛利敬親』、『山口県文書館所蔵アーカイブズガイド―幕末維新編一』（山口県文書館、2010）に掲載されている資料の解説は、各図録に拠った。



103 槍 桐紋螺鈿拵

二王方清

江戸時代(17~18世紀)

1口

刀身/長22.5 幅15.2

柄/長277.0

鞘/長33.0 幅24.5 厚3.5 370-48

萩藩の参勤交代で使用された槍(十文字槍)。東の全体に螺鈿を施し、数か所に毛利家の桐紋の金具をあしらった、大名家の道具にふさわしい豪華な造りである。十文字形の刀身に合わせて、鞘もそれに沿った形となっている。

刀身の茎に「長州萩住玉井刑部左衛門尉^{に おうまさきよ}二王方清作」の銘がある。作者の二王方清は、萩藩の御抱え刀工・二王派に属し、享保3年(1718)に没した人物と考えられている。

参勤交代で、毛利家は3本槍を立てたが、これは島津家、伊達家など数家にのみ許されたもの。江戸時代の大名家の名鑑『武鑑』には、各藩の行列の指物類が描かれており、沿道の見物客はその形や数で行列の大名を見分けていた。

104 関札「亀井^{せきふだ}隠岐守宿」

嘉永4年(1851)2月12日

板・墨書

1対

104.0×21.5×1.6 安部家資料

関札は、江戸時代に公家・大名・役人などが宿駅に泊まった際に、その名前を記して本陣などの玄関先や式台に掲げた木札のこと。

本資料は、嘉永4年(1851)2月12日、津和野藩第11代藩主亀井茲監^{これみ}が、参勤交代の途次、山口町の脇本陣安部家に宿泊した際に掲げられた関札。津和野藩主の参勤交代は芸石往還を使っていたが、山深い難路であったため、幕末期には山口を経て山陽道に出るルートを取っていた。

裏面墨書「亀井 嘉永四年／嘉永四年亥二月十二日夜御止宿／御本陣安部平右衛門」。ちなみに館蔵の亀井氏の関札は、本資料を含めて5点ある。





105 関札「戸川鉦三郎宿」／「毛利筑前宿」

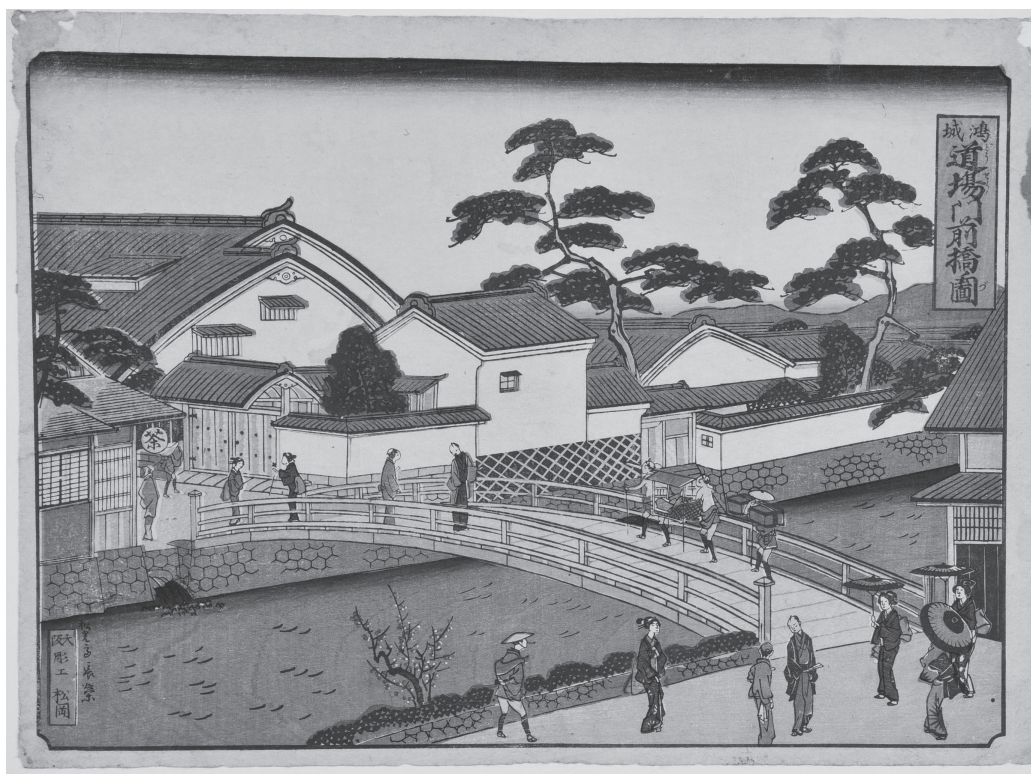
元治元年(1864)

1枚(両面)

92.3×21.0×2.2 安部家資料

第一次長州出兵の降伏条件であった山口城破却の確認のため来山した幕府目付・戸川鉦三郎^{やすちか}(安愛)が、安部家に宿泊した際の関札。片面は、「毛利筑前宿」(一門右田毛利家当主)となっている。

安部家旧蔵の関札11点のうち、このような例は他になく、当時、敵対する幕府役人用ということもあり、既存の関札を応急的に再利用したものか。



106 鴻城道場門前橋ノ図

松光齋長栄 大阪彫工松岡

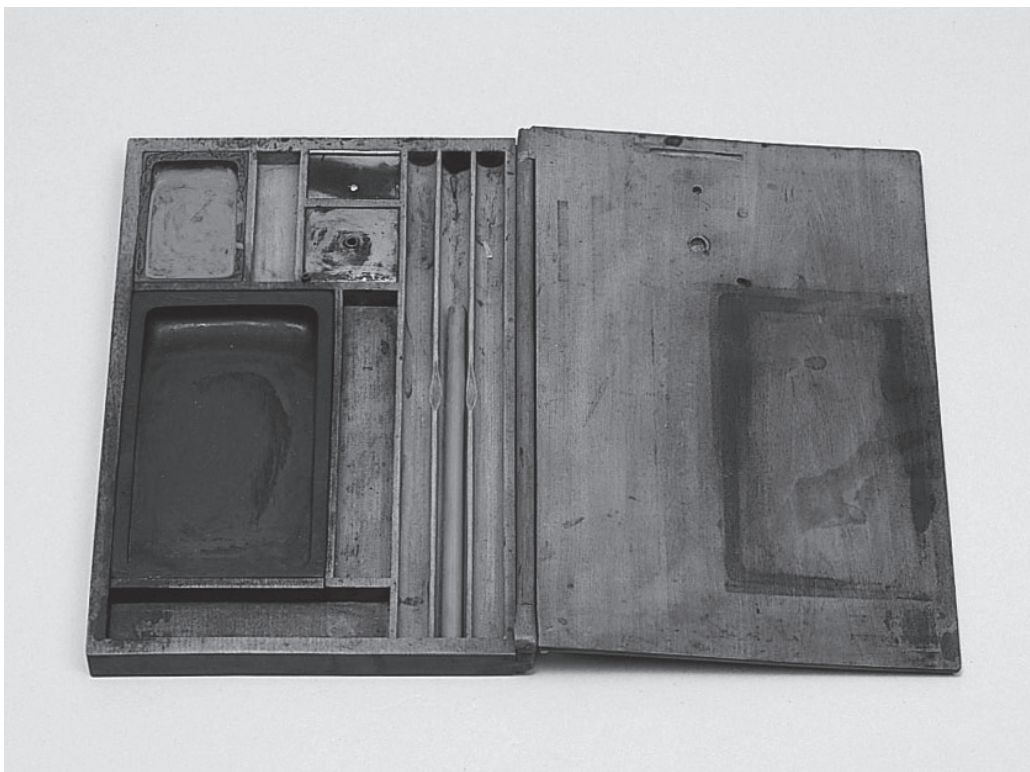
明治初期

1枚

25.0×34.0 920-17-5

山口の名所錦絵連作のうち、山口町の中心部を流れる一の坂川に架かる安部橋周辺を描いたもの。橋を渡った右側に本陣安部家の大きな屋敷が見える（現在は、建物跡を示す石碑が建つ）。No.104・105「関札」は、この安部家ゆかりの資料である。

道場門前は、山口町の中心部で、石州街道筋に位置すると共に、山口と肥中（下関市豊北町肥中）を結ぶ肥中街道の起終点でもあった。



107 携帯用硯箱 木戸孝允所用

幕末～明治初期

1合

22.6×15.3×2.0 木戸73

携帯用の硯箱。当時の携行用筆記具としては、筆と墨壺を組み合わせた「矢立」が一般的。木戸家伝来品。



108 提灯 周布家家紋入り

江戸時代後期

1張

高21.0 幅22.5 周布3-15

周布家の家紋「亀甲に久の字」と「周布」の文字を配列した提灯。周布家伝来品。



109 周布政之助肖像

油彩・キャンバス 額装

1面

59.3×44.7 周布3-1

紋付羽織姿の周布政之助の肖像。周布の写真にこれと同じ姿のものはなく、想像をもとに描かれたもの。画面右下に「KOTAKU」のサインがあるが、作者・制作年共に不詳。周布家伝来品



110 周布千代肖像

油彩・キャンバス

1面

60.5×46.0 個人蔵(山口県立山口博物館寄託)

周布千代は、萩藩士粟屋半右衛門の女で、前妻・小梅の死去にともない、嘉永2年(1849)6月入嫁。後の男爵周布公平(貴族院議員、兵庫県知事、神奈川県知事)の生母となる。この肖像画は、寿像もしくはNo.111の写真をもとに描かれたものか。本像にも「KOTAKU」のサインがあり、No.109「周布政之助肖像」(当館蔵)と同じ作者とわかる。周布家伝来品。



111 周布千代写真

塚本房太郎撮影

明治15年(1882)9月27日

鶏卵紙

1枚

14.3×10.3 個人蔵(山口県立山口博物館寄託)

東京九段の塚本写真館で撮影されたもの。千代54歳の時の撮影とみられる。周布家伝来品。



112 周布家家族写真

鈴木真一撮影

明治10年代後半～20年代前半

鶏卵紙

1枚

10.0×14.8(10.8×16.4) 個人蔵(山口県立山口博物館寄託)

前列中央が周布千代。向かって右隣の少年が長男・周布公平。鈴木真一の九段坂写真館で撮影と推定されている。



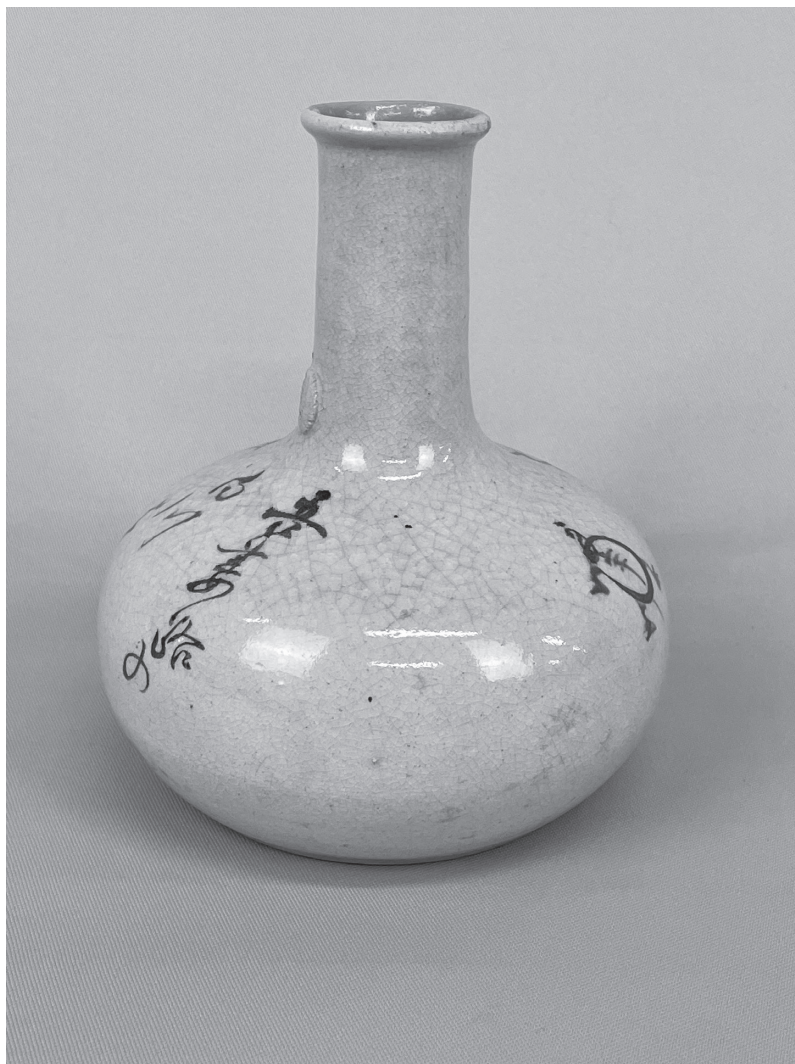
113 染付水指 周布政之助愛用

幕末期

1口

口径17.0 高16.0 個人蔵(山口県立山口博物館寄託)

箱書に「先公愛品 染付水指」とある。周布家伝来品。



114 粟田焼 周布政之助愛用

幕末期

1口

径18.2 高12.9 個人蔵(山口県立山口博物館寄託)

鶴亀に和歌「吾妻路の白川はしのたつみかと」の絵付け入りの焼き物。箱書に「粟田焼 鶴亀模様和歌 先公愛品」とある。周布家伝来品。



115 錫杯洗

幕末期

1口

径13.5 高6.0 周布3-31

箱蓋に、周布政之助の「摘花浸酒春愁愚焼竹煎茶夜臥屋 翼」、北条瀬兵衛(伊勢華)の「天寒夜嗽雲芽淨雪壤晴梳石髮香 小湊筆」の詩書がある。杯洗の底部に、銘「大坂錫新」がある。周布家伝来品。



116 小秤 周布政之助所用

安政6年(1859)3月17日

1合

箱21.2×6.0×2.3 棹長18.6 周布3-40

納箱の底部に「安政六未三月十七日桜田御屋敷詰居之節求之」、同側面に「麻田生用」の墨書がある。
周布家伝来品。



117 尺時計

幕末期

1台

23.6×3.8×2.3 周布3-7

尺時計は、巻き上げた錘が一定の速さで落下することを利用して、錘に付いた指針が時を示すもの。中央の縦に並ぶ「割駒」の位置を変えることで、不定時法に対応している。

割駒の一番上の「六」が「明け六つ」を、「五」「四」の次の「九」が正午を表しており、以下、「八」「七」「六」「五」「四」「三」「二」「一」と続き、一番下の「六」までで約1日の時を知ることができる。本資料の指針は後補。周布家伝来品。



①

②

③

④

⑤

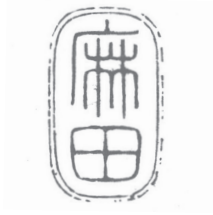


118 周布政之助所用印類

5 類 周布3-4

- | | | |
|---------|-------------|----|
| ①「麻田」 | 2.6×2.0×5.3 | 蠟石 |
| ②「公輔」 | 3.2×3.0×9.0 | 蠟石 |
| ③「慎独」 | 3.6×1.7×9.6 | 蠟石 |
| ④「周布翼印」 | 3.1×3.0×9.3 | 蠟石 |
| ⑤「兼翼」 | 径1.9 高3.0 | 青銅 |

周布政之助使用の印章。周布家伝来品。※印影は原寸大。



①



②



③



④



⑤



119 朱檀縁富貴^{けんびょう}の硯屏 村田清風所用

幕末期

1台

16.0×17.0×8.5 周布3-38

硯屏は、硯の傍に立てて、ちりやほこりなどを防ぐ小さな衝立のこと。

周布公平が「朱檀縁富貴の硯屏」の箱書の傍に「故村田清風翁遺物 公平記」と補記している。衝立面のガラス絵(椿)が伝来の過程で割れているのが惜まれる。周布家伝来品。



120 木戸孝允ほか集合写真

明治初年

鶏卵紙

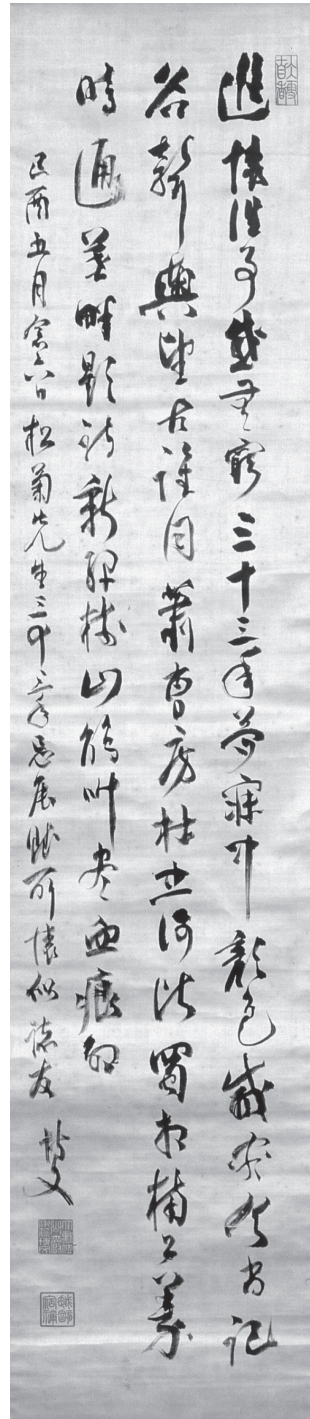
1枚

14.1×18.6 個人蔵(山口県立山口博物館寄託)

明治初年に、横浜の^{しもおかれんじょう}下岡蓮杖の写真館で撮影されたと推定されるもの。

立って書物を開いて眺める姿の木戸孝允(後列右)のほか、椅子に座る^{がのりゆき}何礼之(前列右端)など、外国事務局関係と見られる7人が写っている。

退色が顕著であるのが惜しまれるが、この時期に下岡が撮影した明治政府の元勳クラスの集合写真は極めて珍しいという。周布家伝来品。

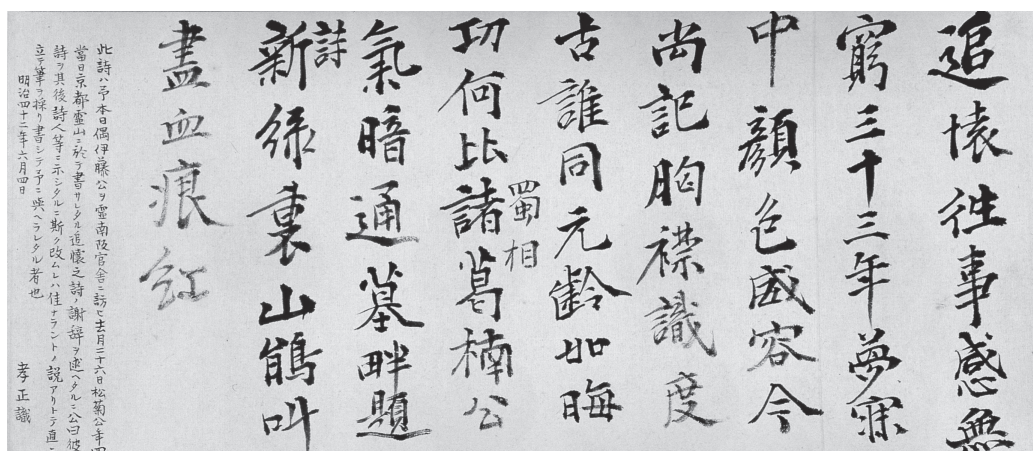


(印)
 追懷往時感無窮 三十三年夢寢中 顏色威容今尚記 名聲輿望古誰同
 蕭曹房杜忠何比 蜀相楠公義暗通 墓畔題詩新綠樹 山鶴叫尽血痕紅
 己酉五月念六日松菊先生三十三年忌辰賦可懷似諸友 (印) (印)

121 木戸孝允三十三年忌弔詩書

伊藤博文
 明治42年(1909)5月26日
 統本墨書
 1幅
 160.5×35.3 木戸17

伊藤博文が、木戸孝允の33回忌に際して作った詩。この弔詞を刻した碑が京都靈山護国神社に建てられている(拓本は本館蔵、木戸20)。木戸家伝来品。



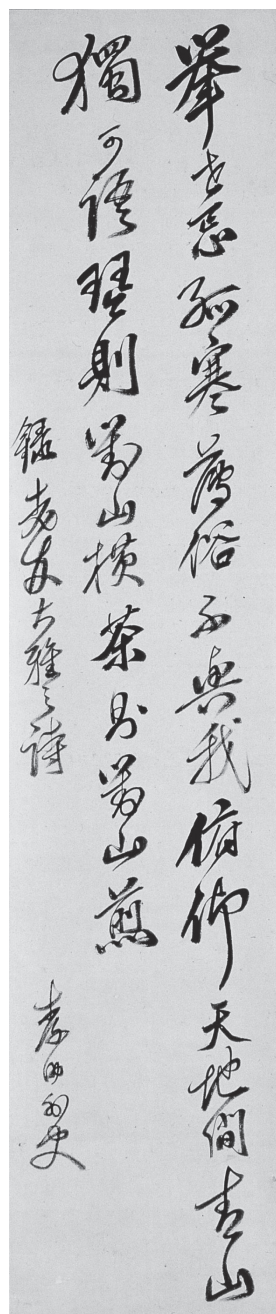
122 木戸孝允三十三年忌弔詩訂正書

伊藤博文
 明治42年(1909)6月4日
 紙本墨書
 1巻
 17.6×39.8 木戸18

伊藤博文が、No121の弔詞に詩人等の意見を入れて訂正したもの。末尾に木戸孝正が経緯を記しており、弔詩訂正の事情が良く分かり興味深い。木戸家伝来品。

識語に「此詩ハ、予本日偶伊藤公ヲ靈南坂官舎ニ訪ヒ、去月二十六日松菊公年回当日京都靈山ニ於テ書サレタル追懐之詩ノ謝辞ヲ述ヘタルニ、公曰彼詩ヲ其後詩人等ニ示シタルニ斯ク改ムレハ佳ナラントノ説アリトテ直ニ立テ筆ヲ採リ書シテ予ニ与ヘラレタル者也 明治四十二年六月四日 孝正識」とある。

举世忌孤寒 薄俗不与我 俯仰天地间
 青山独可語 琴則対山横 茶則対山煎
 録老友大雅之詩 孝助外史



123 木戸孝允詩書

元治元年(1864)7月～慶応元年(1865)4月

紙本墨書

1幅

137.5×30.8 木戸9

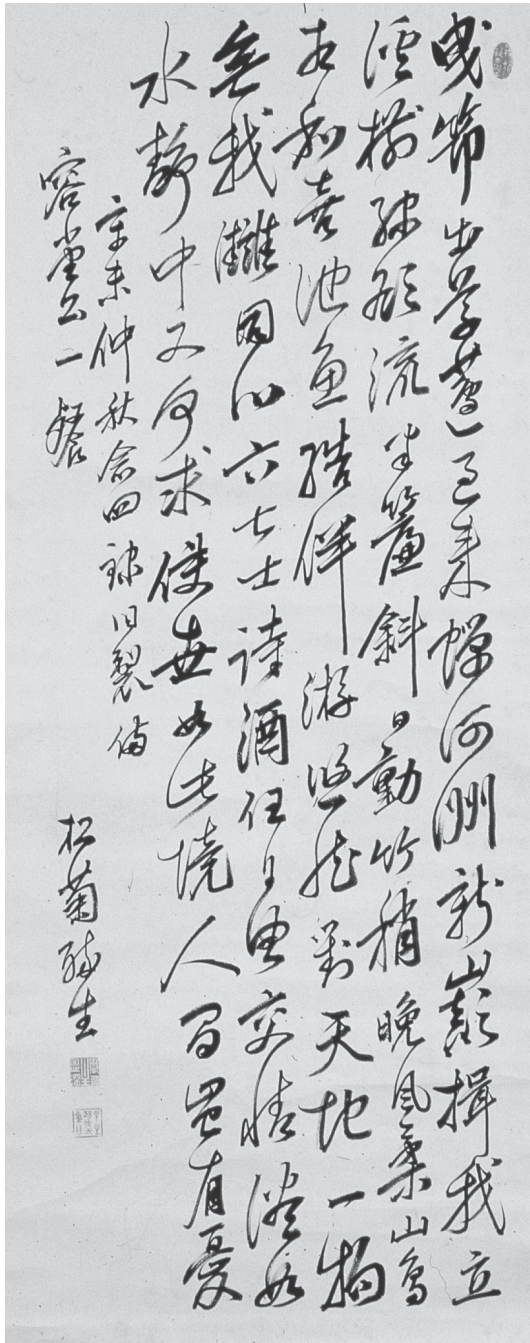
木戸孝允が、出石(兵庫県豊岡市)潜伏中に、藤森大雅(弘庵)の詩を録したもの。木戸は、出石では広江孝助と称していた。木戸家伝来品。

(印)

曳筇出草廬	過來蟬河洲	新巔揖我立	溪樹綠欲流	半簾斜日動
竹梢晚風柔	山鳥相和喜	池魚結伴游	悠然对天地	一物無我讎
同心六七士	詩酒任自由	交情淡如水	靜中又何求	使世如此境
人間豈有憂	辛未仲秋念四録旧製備			

容堂公一餐

松菊醉生 (印) (印)



124 木戸孝允詩書

明治4年(1871)8月24日

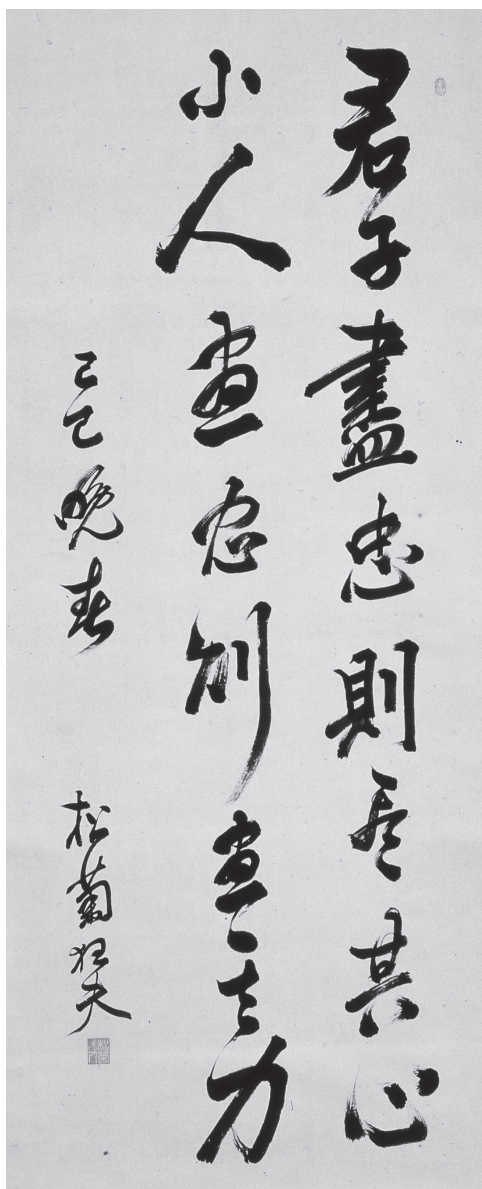
紙本墨書

1幅

137.5×55.4 木戸7

旧作の詩を録して土佐の山内容堂に見せたもの。木戸家伝来品。

(印)
君子尽忠則尽其心
小人尽忠則尽其力
己巳晚春
松菊狂夫 (印)



125 木戸孝允詩書

明治2年(1869)3月

紙本墨書

1幅

136.2×56.5 木戸11

出石潜伏中に世話になった広戸直藏が京都の木戸邸を訪れた時に揮毫したもの。
木戸家伝来品。



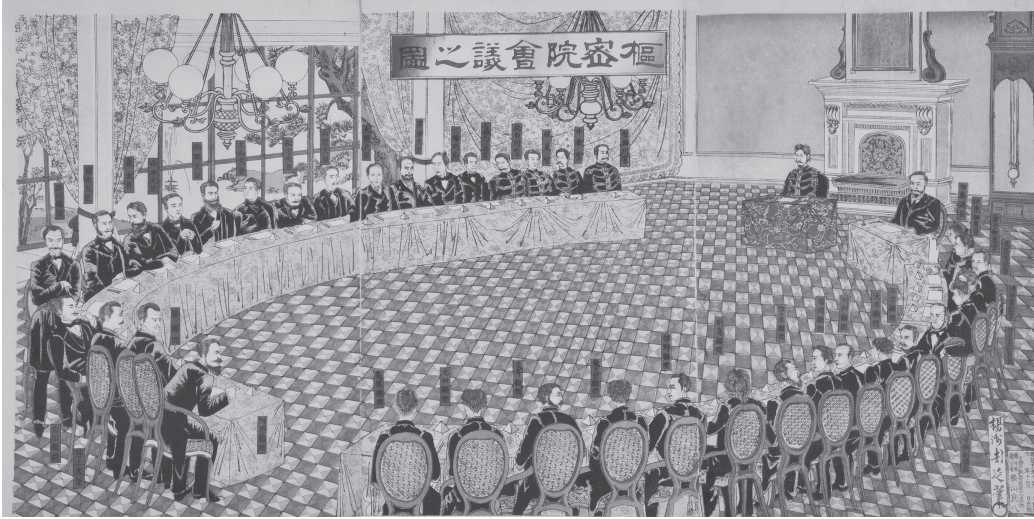
126 木戸孝允肖像

紙本墨画

1 幅

126.1×56.4 木戸1

慶応2年(1866)12月30日、三田尻(防府市)停泊中の英国艦プリンセス・ロイヤル号の艦上で撮影された写真(No.59「木戸孝允・吉川経幹写真」・図版左)をもとに描かれたもの。表装に木戸家の家紋(菊菱)入りの裂地が使用されている。作者・制作年不詳。木戸家伝来品。



127 枢密院会議之図

楊洲周延

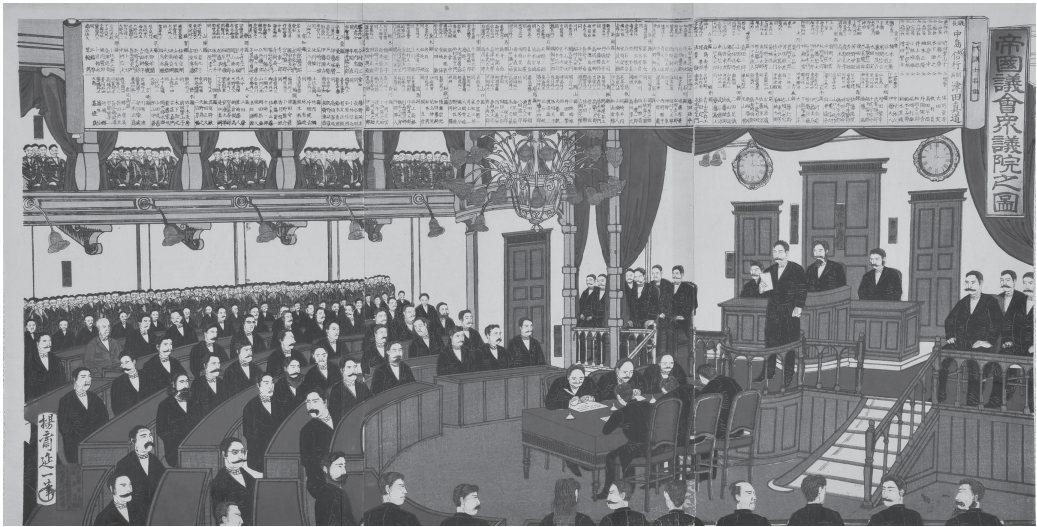
明治21年(1888)10月

1枚(3枚組)

37.4×72.5 920-24

明治21年(1888)4月、憲法草案を審議する機関として枢密院が創設された。議長1名、副議長1名、顧問官24～28名で構成された。

本図は、天皇(正面)臨席のもとに第1回会議が開かれている模様で、出席者各席に名前が示されている。議長は伊藤博文(天皇の向かって右隣)、そのほか秘書官、書記官、顧問、大臣、皇族など総勢39名。なお、出席者を一覧で表示した別タイプの作品も刊行されている。



128 帝国議会衆議院之図

楊齋延一

明治24年(1891)

1枚(3枚組)

37.5×72.0 920-34

明治23年(1890)11月、帝国議会の下院として衆議院が設立され、上院の貴族院とともに帝国議会を構成した。

本図は、第1回帝国議会衆議院会議の様様を描いたもので、上部に代議士名鑑として議員全員を府県別に掲載している。議長は中島信行、副議長は津田真道。山口県関係は7名で、吉敷外三・吉富簡一、末松三郎、阿武外二・井上正一、赤間関豊浦・大岡育造、都濃外二・堀江芳介、野村恒造、玖珂・吉川務の名がある。



129 故大村兵部大輔銅像真図

松森宗平
 明治26年(1893) 3月11日
 木版一度刷 1枚
 39.6×27.6 920-53

明治26年(1893) 2月5日、東京九段の靖国神社鳥居前に建てられた大村益次郎の銅像を描いた版画。高さ約12mにおよぶ巨大な銅像は、東京の新名所として人気を集めたようで、錦絵や絵葉書などが相次いで発行されたが、本図も銅像の竣工まもなく刊行されている。

銅像の作者は彫刻家・大熊氏廣^{おおくまうじひろ}。筒袖羽織に短袴姿の大村が、左手に双眼鏡を持ち、江戸城の富士見櫓から上野の彰義隊を睨む模様を表現したものという。版画では、銅像の台座に記された三条実美の撰文が、振り仮名付きで詳しく紹介されている。また、竣工当時は、像の周りに矢をモチーフとした鉄柵と大砲8門が設置されていたことがわかる(昭和18年撤去)。